ひょうたん島日記

サケのつかみどりに歓声
～大槌川河川敷で「鮭まつり」～

「おおつち鮭（さけ）まつり」が12月1日、大槌町の大槌川河川敷であり、町内外から4000人が参加しました。大槌川を仕切って放流されたサケのつかみどりが、震災後、初めて行われ、100人が挑戦。大人も子供も奮闘し、1人1尾のサケを持ち帰りました。秋サケ漁は今シーズン、比較的、順調な漁獲高をあげています。晴天に恵まれた初冬の河川敷には歓声がこだまし、海の恵みに感謝する一日になりました。

サケのつかみどりには参加費無料で先着100人。祭りの目玉とあって、早朝から整理券に長い列ができ、開始早々、受け付けが締め切られました。参加者は軍手、胴長靴を借りて、大槌川の浅瀬につくられた天然のいけすで、放流されたサケと奮闘しました。1組の制限時間は5分。勢いよく泳ぎまわるサケをなかなか捕まえられず、悪戦苦闘する参加者もいました。

盛岡市内の主婦大隅聡子さん（39）は盛岡市立杜陵小4年の長女はなさん（10）、3年の次女うたさん（8）、長男元（げん）君（5）とやってきました。つかみどりに、はなさん、うたさん、元君が挑戦しました。うたさんは「サケは重いし、ぬるぬるしていて大変だった。でも楽しかった」と感想を述べました。

祭りではフードコンテストがありました。10種類のメニューが開発され、試食、投票の結果、1位に「イカハンバーグ」が選ばれました。スルメイカ、玉ねぎ、ピーマンなどが材料。発案した黒澤峰子さん（64）は「昔からの家庭の味。皆さんに食べてもらいたかった。評価されてうれしい」と感想を述べました。

カムバック「おおちゃん」
～イメージキャラクター故郷に戻る～

被災して姿を隠していた大槌町のイメージキャラクター「おおちゃん」が、約2年8カ月ぶりに故郷に戻ってきました。11月29日に「特別住民票」を交付されたおおちゃんは、早速、12月1日の「おおつち鮭まつり」に出演して愛敬を振りまきました。今後、町の顔としてＰＲに一役買います。

おおちゃんは平成6（1994）年に誕生、「槌」の形と、町のイニシャルの「O」をかたどった姿が人気を呼びました。しかし、震災後、姿を隠し、サケが母なる川に戻るように、秋サケ漁のシーズンに帰郷しました。碇川豊町長によると、この間、全国をめぐって、支援していただいた方々に感謝の旅を続けていたのではないか、ということでした。

おおちゃんは、11月29日の記者会見に現れ、その後、町民課で住民票の交付を受けました。たまたま、転入届を出しにきていた主婦佐藤智美さん、佐藤さんの長男修君（6）、長女茜さん（5）と窓口で一緒になりました。修君も、茜さんも、おおちゃんとふれ合うことができて大喜びでした。

碇川町長は「おおちゃんは復興に向かう町民の心を一つにする役割や、全国の復興支援に感謝を伝える役割を担ってくれるでしょう」と話しています。

PHOTO まちかど

「町方のビジネスホテル3階の窓際の壁に、津波の浸水した跡が残っています。地上から高さ11メートルの浸水線には、『2011.03.11』と表記されています。この建物も、もうすぐ撤去され、津波の痕跡がまた一つ消えていきます」
【12月9日、伊藤陽子さん撮影】

「小鎚川下流で偶然、ヤマセミの撮影に成功しました。冠羽が特徴です。水中に飛び込んで小魚や水生昆虫を捕食します。２羽いましたが、飛ぶ方向が違い、つがいではなさそうです」　【11月13日、三浦寧史さん撮影】

総合政策課では読者の皆さまからのニュース提供をお待ちしています。町民の方々に広く知ってほしい出来事があれば、お知らせください。「PHOTOまちかど」への写真投稿も歓迎です。変容する町の姿、震災前から変わらない町の光景を写真で切り取り、お寄せください。また、広報誌への感想や提言を、お送りください。はがき、手紙の場合は、住所、氏名、連絡先（電話番号など）を明記のうえ、〒028-1192　大槌町上町1-3　大槌町役場総合政策課・広報誌担当へ。

問 総合政策課　企画調整班　TEL 0193-42-8724
E-mail：sougouseisaku @town.otsuchi.iwate.jp

3年目の仮設 ～より良き暮らしのために～

リメイクファッションショー開く
～ 仮設の住民がモデルに～

リメイク服を着た仮設住宅の住民によるファッションショーが、12月1日、大槌町の中央公民館で開かれました。被災地支援の一環として全国から贈られた和服を材料に、洋服に仕立て直しました。男性1人を含む16人のモデルは、それぞれポーズを取り、誇らしげでした。都会の華やかなファッションショーではありませんでしたが、会場は温かな雰囲気に包まれました。

ファッションショーは「三陸復興フォーラム in 大槌」のイベントとして行われました。出演者は大槌第7仮設団地の大槌ひまわりの会や、小鎚第12仮設団地の中村仮設手芸教室などのメンバー。一人ひとりが手づくりのリメイク服で登場、観客席と観客席の間の通路を舞台に、歩いたり、ポーズをとったりして拍手を浴びました。

リメイク服作りを指導したのは雫石町に住む、岩手県環境アドバイザーの小赤澤直子さん（67）。遠野市で被災地支援活動をしている遠野まごころネットを通じて、全国からタンスにしまい込んである和服を集め、洋服に作り直しました。小赤澤さんは「タンスに眠っている着物を再利用する試みに、仮設のお年寄りの方々が取り組み、命を吹き込んでくれました。これからも続けていきたい」と話しました。

小鎚第12仮設団地から参加した山崎ウメさん（82）は舞台に立った後、「ファッションショーに出ることができるとは思わなかった。楽しかった」と感想を述べました。